『ほっとたいむ通信』　第八十九号

桜の花も散り、若葉の映える季節となりました。
新年度が始まりました。世界情勢は益々不安定ですが、早く平和な世界が来るように祈るばかりです。

「白い杖の人の話」

「危ない！」

駅の構内での出来事です。
地下街へ通じる階段のところで、白い杖をついた女性が今にも転げ落ちそうになるのが見えました。
＋　＋　＋　＋　＋　＋　＋
慌てて駆け寄ります。

「大丈夫ですか」

すると、

「ありがとう」

とお礼を言われ、続けて、

「ところで、トイレはどこですか」

と聞かれました。

「ご案内しましょう」

と、右肩を差し出し、

「掴（つか）まってください」

と言いました。以前は私も、そんな時にどうしたらよいのかわからなかったのですが、目の不自由な友人から、ヘルプの仕方を教わっていたのでした。決して手を引っ張ったり、抱きかかえたりしてはいけない。肩に手を置いてもらうか、腕に掴まってもらい、先導するだけでいいのだと。

ところが、です。差し出した肩に手を乗せてくれないのです。「どうぞ」という声は聞こえているはずなのに、

「右ですか、左ですか」

と聞かれました。

「左です」

と答えると、その女性は雑踏の中をすたすたと歩き始めてしまいました。また危ない目に遭ってはいけないと思い、

「こっちですよ」

と声をかけて一緒に歩き始めました。見ず知らずの私の言うことゆえ、信じてもらえないからでしょうか。警戒心からかな。ちょっと寂しい気がしました。

角を曲がる度に二度ほど、「肩に掴まって…」とお願いしましたが、無視されてしまいました。弱りました。相手が異性なだけに、信用されていないのだろうかとも考えました。

仕方がないので、世間話をして声で誘導することにしました。その間、あっちこっちに杖をぶつけてしまい、こちらはヒヤヒヤし通しです。

さて、トイレの近くまで来て、さらにもう一度お願いをしてみました。

「肩に掴まってください」

と言いかけたら、すかさずこう返事が返ってきました。

「ありがとう。でもね、肩に掴まると勉強にならないんですよ」

「え……？」

「自分で確かめながら歩かないと、今度来た時に、トイレに一人で行けないでしょう」

ハッとしました。この一言ですべてに合点がいきました。

「疑われているのかな」などと思った自分。そして、「助けてあげているんだ」と思っていた自分がそこにいて恥ずかしくなりました。

反省しきり。
情けは人のためにならず。しかし、白い杖の人を手助けすると、その日は必ず良いことが起きるのです（ホントなんです！）。今回も、ヘルプしたつもりが、反対に思わぬ人生訓を学ばせてもらいました。

「毎日が楽しくなる17の物語」より抜粋

株式会社三悦
代表取締役　樋田浩三
令和八年四月